

日本書紀に記述の 179 万 2470 年をホツマツタエで解説

吉田 六雄

東京赤坂 ホツマツタエ史学研究会

woshite@ymail.ne.jp

キーワード ホツマツタエ, アマテル神, 神武天皇、ニニキネ、天孫降臨

1 はじめに

日本書紀、ホツマツタエを読むと、『神武天皇が奈良の橿原に、都を開かれる七年前のことになる。この中で、神武天皇は兄たちや皇子たちに「天神」や「天祖」の歴史を語られていた。その一節に「自天祖降跡以逮、于今一百七十九萬二千四百七十餘歳」の記述があった。また、この「大きい数字」は、記紀、倭姫命世記、そして先代旧事本紀にも記述されている数字類であった。これまで、意味不明とであった。

日本書紀(原文)

四十五歳。……皇祖皇考、乃神乃聖。積慶重暉、多歴年所。自天祖降跡以逮。于今一百七十九萬二千四百七十餘歳。而遼＝之地。猶未霑於王沢。

訳文(引用、日本書紀(上)山田宗陸)

(神武天皇)45 歳……皇祖、皇考(父)は、神聖で、善政をつみ、恩沢の光を重ねて、多くの年がたった。天祖が降ってから、今まで一七九万二四七〇余年。しかるに、遼遠の地は、いまなお皇化の恩恵をうけていない。

2 ホツマツタエで解説

平成六年三月(約 30 年前)に、「ホツマツタエ」に接した筆者は、古代の旧暦の「スス暦」と新暦「アスス暦」に魅せられてホツマツタエを研究して来た。その甲斐があって、「ホツマの記述にしかない事跡が現存している」ことがわかって来た。

明らかになった事項

- (一)「一百七十九萬二千四百七十餘歳」は、ホツマ・エトで記録されていた。
- (二)自天祖降跡以逮の本来の意味は、ワカヒトの誕生からを指す「自天祖誕生以逮」であった。(日本書紀編纂時の翻訳ミスの可能性あり)
- (三)古代の 1 日は、「16 穂(ホツマ・エト期間)」であった。
- (三')約 27 鈴以降、1 日が「8 穂(ホツマ・エト期間)」に

改暦の記録があった。だが、人物の年齢、在位期間は、逆に、長大化していた。

- (四)スス暦の暦形態は、太陽暦にて計算した時の精度が最も高かった。
- (五)スス暦時代の期間は、神武天皇以前に約390.153年間、五十鈴千枝二十年も存在していた。
- (六)アスス暦や日本書紀暦は、スス暦(大きい暦数字)からの改暦時に誤変換された可能性が高いようだ。例として、天皇の高年齢化など。

この度、古代日本の歴史(年代)研究を正しく理解してもらうため、広く資料を公開し、読者の評価をお願いしたいと思う。

I 部 瓊瓊杵尊 天孫降臨

天つ祖の始まり

日本書紀(注一)巻の第三は、「神日本磐余彦の天皇、諱は彦火々出見、彦波瀲武??草葺不合の尊の第四の子にまします。」より始まる長文である。そして私が今回論文のテーマとして取り上げる内容は、巻の第三の八頁に記述された「天つ祖の降りましより以遠、今に一百七十九萬二千四百七十餘歳なり。」の文章になる。次の行に漢字文を併記する。

漢字文

自天祖降跡以逮、于今一百七十九萬二千四百七十餘歳

(注一)

日本古典全書 日本書紀二(武田祐吉校注)の神武天皇紀を引用・抜粋した。

では、なぜこの「大きい数字」を取り上げたのかと云えば、私の「歴史への想いは、古代日本を遡ることで、この国の起源が、紀元前の何年前になるのだろうか」との自問である。この自問に対し、この「大きい数字」が、古代日本の歴史を紐解くヒントになるのでは?と直感

した。そして次に、「天つ祖の降りましし」の「天つ祖」は、年代を解く「キーポイント」になると推定した。だが、「大きい数字」の年代が判明したとしても、この「大きい数字」を採用した時の「天君」が不明のままであるならば、この大きい数字は歴史として扱えない。このように考えると「大きい数字」と「天つ祖」は一体であり、詳しく調べて見る必要があった。

わが国には記紀があり、また多くの古史古伝の資料がある。その中で、日本書紀の「天つ祖」は、先ず、どの神のことを指しているのだろうか、検証することにした。そこで神武天皇記・巻第三(七～九頁)について、読んで見た。

(漢文)

日本書紀 巻第三 神日本磐余彦天皇 神武天皇及年四十五歳、謂諸兄及子等曰、昔我天神高皇産靈尊、大日靈尊、举此豊葦原瑞穂国、而授我天祖彦火瓊瓊杵尊。於是火瓊瓊杵尊、闢天関、披雲路、驅仙蹕以戻止。是時運属鴻荒、時鍾草昧、故蒙以養正、治此西偏。皇祖皇考、乃神乃聖、積慶重暉、多歴年所、自天祖降跡以逮、于今一百七十九万二千四百七十余歳。

(訳文)

日本書紀 巻第三 神日本磐余彦天皇 神武天皇【年四十五歳に及(いた)りて、諸兄(いろせたち)と子等(みこたち)とに謂(の)りたまひしく、「昔我が天つ神、高皇産靈の尊、大日靈の尊、この豊葦原の瑞穂の国を挙げて、我が天つ祖、彦火の瓊々杵の尊に授けたまひき。ここに火の瓊々杵の尊、天の関(と)を開き、雲路を披(おしは)らき、仙蹕(さき)を馳せて戻止(いた)りたまひき。この時に、運(よ)は鴻荒(あらき)にあひ、時は草昧(くらき)に鍾(あた)れりき。枯、蒙(くら)くして正しきを養ひ、この西の偏(ほとり)を治(し)らしめしき。皇祖皇考(みおや)、神にしてまた聖にましまし、慶を積み、暉(ひかり)を重ね、多さに年所(とし)を歴(へ)たり。天つ祖の降りまししより以遠、今に一百七十九萬二千四百七十餘歳なり。】

そして天つ祖とは、「我が天つ祖、彦火の瓊々杵の尊に授けたまひき」とあるところから、「瓊々杵の尊」のことを指しているようだ。このことから「天つ祖の降りまししより以遠、今に一百七十九萬二千四百七十餘歳なり」を翻訳すると、「天照大神の御孫であり、かつ、天つ祖の瓊々杵の尊が、九州筑紫の高千穂の峰に降りられたこの方、今日までに経過した年数は、一百七十九萬二千四百七十餘歳になる。」

一百七十九萬二千四百七十餘歳

この訳に対し武田祐吉は、日本書紀・巻の第三の八頁において、「一百七十九萬二千四百七十餘歳」をどのように訳しているのかと思い、神武天皇紀の校注(一四)を読んで見た。校注の記述は、「(一四)天孫降臨からこの時まで年数を挙げたのであるが、後人の記述とする説がある。しかしどの本にもあり、非常に年数の多い事を数字に挙げて述べたものと見るべきである。」と記述していた。

しかしどの本にもあり

武田祐吉は、「一百七十九萬二千四百七十餘歳」の大きい数字のことを指して、「どの本にもあり」と記載した。この記載の背景は、何であろうか。私なりに武田先生の気持ちを考えて見た。恐らく「この数字の根拠は自分ではわからない。そのため他の文献を調べて見た。(だがその本の題名までは記載してないが、)その調べた本の多くにも記述していたため、現在の私には意味がわからないまでも、将来の研究者のためにも、無視や抹消できないだろうと思った」と察した。その武田祐吉の没年は昭和三十八年である。今から半世紀も昔になる。当時の武田祐吉が調べた本については、今となっては確かめる術がない。否ないだろうかだろうか。

武田祐吉の調べた本(推測)

そして、武田祐吉が見たであろう本の内、「一百七十九萬二千四百七十餘歳」が記述されている本について私なりに調査して見た。

最初に見つけたのは、「倭姫命世記」の「神武天皇記」に「自天祖降跡以逮、于今一百七十九萬二千四百七十餘歳」の記述があった。また「神代事紀」には、他の数字の三例が、次の通り記述されていた。

- ①紫日向高千穂口觸之峰仁に、天降・・(中略)・・治天下、二十一萬八千五百四十二年
- ②彦火々出見尊・・(中略)・・治天下、六十三萬七千八百九十二年。
- ③彦波瀲武??草葺不合尊・・(中略)・・治天下、八十三萬六千三十二年

二つ目に、先代旧事本紀・訓注(大野七三編著)も調査して見た。百四十三頁の「皇孫本紀」の項に、日本書紀と同様に「自天祖降跡以逮、于今一百七十九萬二千四百七十餘歳」と記述されていた。

大きい数字の意味が不明

この「一百七十九萬二千四百七十餘歳」について、私は、「天照大神の御孫であり、かつ、天つ祖の瓊々杵の尊が、九州筑紫の高千穂の峰に降りられたこの

方、今日までに経過した年数は、一百七十九萬二千四百七十餘歳になる」と訳した。だが、現在の社会で考えた限りでは、「一百七十九萬二千四百七十餘歳」を数えた歴史がない。現在のグレゴリー暦でも「二千十一年」程度である。(ただユダヤの歴史では、五千年の歴史を聞くが)

そして、日本書紀、倭姫命世記および先代旧事本紀を調べた限りでは、「一百七十九萬二千四百七十餘歳」の意味は、わからないままである。

Ⅱ部 古史古伝

ホツマツタエ

世間では、ホツマツタエのことを「古史古伝」の一種として紹介している。そのため、時に偽書扱いされている。だが私は、平成六年三月六日より「ホツマツタエ」を研究してきたが、前述した「一百七十九萬二千四百七十餘歳」の大きい数字も、他文献と少し表現は違うが、次のようにホツマツタエに記述している。

ホツマツタエ

御機の二十九 タケヒト大和討ちの文
【29-5～10 時にタケヒト 吾平姫 娶り生む皇子 タギシミ 君歳四十五 物語り「昔の御祖 タカムスビ 日高見生みて 百億万穂 過ぎて天日の 大御神 天成る道に 臣お治す 皇子のオシヒト 譲り受く 皇孫 キヨヒト また受けて 別雷の 天君と 天の磐座 押し開き 稜威の道別に 治まりて 御祖に仕ふ 道開きて 光重ぬる 年の数 百七十九万 二千四百 七十穂経るまで 遠近も 閏はふ国の 君ありて 村も乱れず 天の道」】

解説

【29-5～10 時にタケヒトは、九州宮崎の吾平山稜の地で、父のフキアエズが神上がりされるが、その後、喪に服される間に、吾平の地の娘である吾平姫を娶られ、その後、子を生まれたのが、皇子のタギシミである。その後、タケヒトの君は、宮崎の宮より神武東征をされたが、その時の歳は四十五の時であり、この話はタケヒト君の神武東征の物語りの話です。「昔の御祖のタカムスビは、宮城の日高見の国を生みて、百億万穂の世を過ぎて、天日の大御神のアマテル神は、天成る道に神世の開かれて、臣お治す。アマテル神の長子の皇子のオシヒトが、次の世を 譲り受く。

更に、アマテル神の皇孫キヨヒトが、また天成る道を受けて「別雷の天君と名」を賜う。 天の磐座 押し開き

稜威の道別に 治まりて 御祖のタカムスビに仕ふ、そして、アマテル神が天成る道開きて 光重ぬる 年の数 百七十九万 二千四百 七十穂経るまで 遠近も閏はふ国の 国君ありて 村も乱れず これこそが天の道であるぞ。】

大きい暦数字の解説

そして記紀や倭姫命世記や先代旧事本紀が解説できないでいる、大きい数字について、ホツマツタエは解説方法を、「私にだけ」教えてくれていた。だが、解説方法を教えて戴いた日々は、途轍もない日数になっていた。

大きい暦数字と名付ける

私はこの「大きい数字」を解説できた時点で、「大きい暦数字」と名付けた。それではこれから私が手掛けた、「大きい暦数字」の解説エッセンスを、日本中に公開したいと思う。なお「大きい暦数字」が、ホツマ・エトより作成されているため、以後のホツマ・エトの説明は、少し詳しく説明する。

ホツマ・エトとは

ホツマツタエの暦の基本は、ホツマ・エト(一穂～六十穂で一周)より組み立てられている。表示の仕方には、累計数を表す「大きい暦数字」と年号に当たる「鈴、枝、穂」の二つの方法で表示されている。

ホツマ・エトの表示

ホツマ・エトは、最少単位を「穂」と数える。そして中国渡来の干支と同じように「一～六十」を一周りとするエトである。だが、中国・干支との違いは、二周目以降に発生する。中国エトには、位上りはないが、ホツマ・エトの二周目以降は、位上りがわかるように「枝」の単位が採用されている。エトの六十一穂は、表示として、「一枝一穂」となる。更に「枝」が「千枝」になると、位上りがわかるように「鈴」の単位が採用されている。エトの「千枝一穂」または、「六万一穂」は、表示として、「一鈴一穂」となる。

ホツマ・エトの作られ方

ホツマ・エトは、方角を示す「キツオサネ」と、組み合わせを意味する「アミヤシナウ」、それに兄弟を意味する「エト」の言葉を組み合わせで作られている。この「五音」「六音」「二音」の言葉を組み合わせると、全六十通りの「エト」ができる。そして、最初のエトは「キアエ」次は「キアト」になっている。これを続けて行くと、次のホツマ・エト表ができる。

表 キアエ・エト表 数字：順位番号を示す。

キアエ 1.	キアト 2.	ツミエ 3.	ツミト 4.	オヤエ 5.	オヤト 6.
サシエ 7.	サシト 8.	ネナエ 9.	ネナト 10.	キウエ 11.	キウト 12.
ツアエ 13.	ツアト 14.	オミエ 15.	オミト 16.	サヤエ 17.	サヤト 18.
ネシエ 19.	ネシト 20.	キナエ 21.	キナト 22.	ツウエ 23.	ツウト 24.
オアエ 25.	オアト 26.	サミエ 27.	サミト 28.	ネヤエ 29.	ネヤト 30.
キシエ 31.	キシト 32.	ツナエ 33.	ツナト 34.	オウエ 35.	オウト 36.
サアエ 37.	サアト 38.	ネミエ 39.	ネミト 40.	キヤエ 41.	キヤト 42.
ツシエ 43.	ツシト 44.	オナエ 45.	オナト 46.	サウエ 47.	サウト 48.
ネアエ 49.	ネアト 50.	キミエ 51.	キミト 52.	ツヤエ 53.	ツヤト 54.
オシエ 55.	オシト 56.	サナエ 57.	サナト 58.	ネウエ 59.	ネウト 60.

大きい暦数字の解説式

大きい暦数字を解説するには、「 $Y = AX + B$ 」の一次方程式の変形を利用すると解説できる。
式は、「 $Y = AX + BY' + C$ 」となる。

式の英字を説明すると、次の通りとなる。

Y: 大きい暦数字、A: 任意の鈴数、X: 鈴の常数
(一鈴: 千枝、六万穂)、B: 任意の枝数、Y': 枝の常数
(一枝: 六十穂)、C: 任意の穂数

大きい暦数字⇒ホツマ・エト(鈴枝穂)に変換する

例題①

ホツマツタエ文の中から引用すると、「二十一の鈴の年すでに 百二十万七千 五百二十に」の文章がある。この意味であるが、「二十一の鈴」は、 AX に該当する。そしてこの文には、 $BY' + C$ を表記してない。また「百二十万七千 五百二十」は、 Y に該当する。これを先ほど説明した一次方程式の $Y = AX + BY' + C$ に代入すると、等式 百二十万七千五百 = 二十一× X + $BY' + C$ になる。

更に、ここで、 X 、 Y に常数を代入すると、方程式は、百二十万七千五百 = 二十一×六万穂 + B ×六十穂 + C となる。
それでは、 B と C を求めて見たいと思う。 B と C を求める過程では、先ず大きい暦数字より、①鈴を求める。鈴の残った小数点以下の数字より、更に②枝を求める。同じように、最後に③穂を求めることになる。説明は少し複雑になるが、この順序で説明する。

大きい暦数字を「 Y 」とすると、
 $Y =$ 百二十万七千五百二十になる。この式より、まず①鈴の値を求めると、
 $Y =$ 百二十万七千五百二十を、一鈴の六万穂で割り算する。
 $A =$ 二十。一二五三三…三鈴が求められる。
①二十鈴が求められる。

次に②枝の値を求めると、 A の値より整数の二十鈴を差引くと、残りの値が②枝である。

$A =$ 二十。一二五三三…三鈴より①二十鈴を差引くと、残り $A = 0$ 。一二五三三…三鈴となる。この鈴と枝の関係は、一鈴が千枝となるため、
 $A = 0$ 。一二五三三…三鈴に千枝を掛け算すると、
 $B =$ 百二十五。三三…三枝が求められる。②百二十五枝が求められる。

次に③穂の値を求めると、
 B の値より整数の百二十五枝を差引くと、残りの値が③穂である。
 $B =$ 百二十五。三三…三枝より②百二十五枝を差引くと、残り $B = 0$ 。三三…三枝となる。この枝と穂の関係は、一枝が六十穂となるため、
 $B = 0$ 。三三…三枝に六十穂を掛け算すると、
 $B =$ 十九。九九…九穂が求められる。③二十穂が求められる。

このようにして求めた、例題①の「二十一の鈴の年すでに 百二十万七千 五百二十に」の文章の意味は、ホツマツタエの暦である「鈴暦」を構成する鈴、枝、穂の値が隠れていた。このエト暦の鈴、枝、穂の値で表現すると、二十鈴百二十五枝二十穂となっていた。

だが、良く見ると、計算で求めた鈴の値は、二十鈴であるが、ホツマツタエの文章は、この時、「二十一の鈴の」と記述していた。すると、「年すでに 百二十万七千 五百二十に」の意味は、計算で求めた「二十鈴百二十五枝二十穂」でなく、一鈴を加算した「二十一鈴百二十五枝二十穂」のこととなる。このことは、鈴暦の暦を「数え年」と同じように数えていた。

例題②

「二十一鈴 百二十五枝 年キシエ 初日ほのぼのいずる時」。この文章は、ホツマツタエに記述される「ワカヒト、のちのアマテル神」の生れた日の鈴暦の「鈴、枝、穂」の表示である。このエト暦の表示を大きい暦数字に変換すると、①鈴の値を得るには、二十鈴に六万穂を掛け算して、百二十万穂を得る。②枝は、百二十五枝に六十穂を掛け算して、七千五百穂を得る。次に③穂は、ホツマツタエの「エト」の三十一番目の「キシエ」である。この①、②、③の鈴、枝、穂の値を加算すると、百二十万七千五百三十一穂を得ることができる。

検証、「自天祖降跡以逮、于今一百七十九萬二千四百七十餘歳」

大きい暦数字とホツマ・エトの関係がわかった所で、「自天祖降跡以逮」と「一百七十九萬二千四百七十餘歳」について、検証することにした。なぜ検証するかと

云えば、日本書紀の記述とホツマツタエの「天祖」の記述において、少しニアンスが違うと感じたからである。そこで大きい暦数字が理論的に多くの資料が記載されている「ホツマツタエ」をベースに検証して見たい。

ホツマツタエのスス暦は、一鈴一穂から始まり～五十鈴で終焉する。その時の大きい暦数字「三百万穂」になる。その三百万穂より、天孫降臨した日～神武天皇四十五歳までの経過日数の「一百七十九萬二千四百七十餘歳」を引き算すると、答えは、「一百二十万七千五百三十穂」の大きい暦数字になる。

(式)

三百万穂(一)－一百七十九萬二千四百七十餘歳＝百二十万七千五百三十穂となる。

この(式)で求めた大きい暦数字の①「一百二十万七千五百三十穂」と、ホツマツタエに記述の②「ワカヒト、のちのアマテル神」が生れた日の大きい暦数字「百二十万七千五百三十一穂」を比較すると、違いは「一穂」である。このことから「天自天祖降跡以逮～今」文の大きい暦数字の数え初めの天君は、瓊瓊杵尊でなく、ワカヒトのちのアマテル神ではなかっただろうか？

結論

前述のように「降臨」と「大きい暦数字」の関係を検証してきたが、今回の検証結果から判断し、日本書紀で記述している漢文、瓊瓊杵尊の「自天祖降跡以逮、于今一百七十九萬二千四百七十餘歳」とする文章は、見直されるべきで、正しくはワカヒトの「誕生」の言葉に差し替えて、「自天祖誕生以逮、于今一百七十九萬二千四百七十餘歳」とすべきであった。そして、「ワカヒトの誕生日を起点」とすべきであった。このミステイクが発生した時期は、古史古伝を一書として、紀元七百二十年に日本書紀が編纂されたが、この時の「一書」の翻訳ミスと思いたい。その証拠に、ホツマツタエの同個所の同文章を読むと、「天つ祖」は、瓊瓊杵尊であると記述していない。ホツマツタエの記述は、「天祖に仕ふ」と、なっており、ホツマツタエの直訳文は「ミオヤニツカフ」である。その証拠に、「昔の御祖」と「天祖に仕ふ」の「天祖」は同じ意味であり、天祖とは、「高皇産靈、大御神などの神々」を指すと思われるが、大きい暦数字の比較検証からこの場合の「天祖」とは、「ワカヒト、のちのアマテル神」を指していた。

ホツマ 御機之二十九 タケヒト大和討ちの文

【29-5～10 時にタケヒト 吾平姫 娶り生む皇子 タギシミ 君歳四十五 物語り「昔の御祖 タカムスビ 日高見生みて 百億万穂 過ぎて天日の 大御神 天

成る道に 臣お治す 皇子のオシヒト 譲り受く 皇孫 キヨヒト また受けて 別雷の 天君と 天の磐座 押し開き 稜威の道別に 治まりて 御祖に仕ふ 道開きて 光重ぬる 年の数 百七十九万 二千四百 七十穂経るまで 遠近も 閏はふ国の 君ありて 村も乱れず 天の道」】

解説

【29-5～10 時にタケヒトは、九州宮崎の吾平山稜の地で、父のフキアエズが神上がりされるが、その後、喪に服される間に、吾平の地の娘である吾平姫を娶られ、その後、子を生まれたのが、皇子のタギシミである。その後、タケヒトの君は、宮崎の宮より神武東征をされたが、その時の歳は四十五の時であり、この話はタケヒト君の神武東征の物語りの話です。「昔の御祖のタカムスビは、宮城の日高見の国を生みて、百億万穂の世を過ぎて、天日の大御神のアマテル神は、天成る道に神世の開かれて、臣お治す。アマテル神の長子の皇子のオシヒトが、次の世を 譲り受く。更に、アマテル神の皇孫キヨヒトが、また天成る道を受けて「別雷の天君と名」を賜う。 天の磐座 押し開き 稜威の道別に 治まりて 御祖のタカムスビに仕ふ そして、アマテル神が天成る道開きて 光重ぬる 年の数 百七十九万 二千四百 七十穂経るまで 遠近も 閏はふ国の 国君ありて 村も乱れず これこそが天の道であるぞ。】

アマテル神の生まれ日～天自天祖降跡以逮までの経過年数の期間は、西暦の太陽暦換算で「約183. 52026年」であった。

考察

ホツマツタエの記述より「大きい暦数字の歳」の基準は、「一日が十六穂」、また(約)27鈴以降は「一日が八穂」であることがわかった。このことから、(約)27鈴前後の日数の変化を穂を基準にして相対的に見ると、「十六穂」の場合、前では一日、後では二日となっていた。このため、(約)27鈴以降は、(約)27鈴以前に対し二倍暦になっていた。

これにより、頭書の「自天祖降跡以逮、于今一百七十九萬二千四百七十餘歳」の古代の経過年数を算出すると、次の式より太陽暦にて約183. 52026年となる。(式)

(1)アマテル神の生まれ年～(約)27 鈴まで

①アマテル神の生まれ、

21 鈴 125 枝 31 穂(1, 207, 531 穂)

②1 日 16 穂の最後の年

(約)27 鈴(1, 560, 000 穂)

③、②-①の差の大きい暦数字

=1, 560, 000 穂 - 1, 207, 531 穂

=352,469 穂

④年の算式

$$=352,469 \text{ 穂} \div 16 \text{ 穂/日} \div 365.2422 \text{ 日/年} \\ =\text{約 } 60.31426 \text{ 年}$$

(2)(約)27 鈴～一百七十九萬二千四百七十餘まで

①1 日 16 穂の最後の年、(約)27 鈴(1, 560, 000 穂)

②光重ねて一百七十九萬二千四百七十餘歳
(3, 000, 001 穂)

③、②-①の差の大きい暦数字

$$=3, 000, 001 \text{ 穂} - 1, 560, 000 \text{ 穂} \\ =1, 440, 001 \text{ 穂}$$

④年の算式

$$=1, 440, 001 \text{ 穂} \div 32 \text{ 穂/日} \div 365.2422 \text{ 日/年} \\ =\text{約 } 123.206 \text{ 年}$$

(3)アマテル神の生まれ年～光重ねて

→ 一百七十九萬二千四百七十餘歳

①、(1)+(2)の年数

$$=\text{約 } 60.31426 \text{ 年} + \text{約 } 123.206 \text{ 年} \\ =\text{約 } 183.52026 \text{ 年}$$

スス暦の初め～五十鈴千枝二十年までの経過年数の期間は、西暦の太陽暦換算で「約390.153年」であった。

考察

ホツマツタエの記述では、スス暦は、ウビジニ～神武天皇の初期で終わり、その間は、五十鈴 千枝二十年と記述している。この期間の五十鈴千枝二十年までを太陽暦に換算すると、スス暦の経過年数は、太陽暦にて約390.153年になる。そして、このスス暦の年代は、アスス暦(日本書紀の暦)以前の年代になる。益して、天神、天君しては、ウビジニ～神武天皇までは「10代」を数えることも重みをもって来るようです。

(式)

(1)1日16穂の最後の年、(約)27鈴

→ 1, 560, 000 穂

$$=1, 560, 000 \text{ 穂} \div 16 \text{ 穂/日} \div 365.2422 \text{ 日/年} \\ =\text{約 } 226.946 \text{ 年}$$

(2)1日8穂の最後の年、(約)51鈴20年(注記)

→ 3, 000, 020 穂

(2`)(2)の経過穂、(2)-(1)の差

→1, 440, 020 穂

$$=1, 440, 020 \text{ 穂} \div 32 \text{ 穂/日} \div 365.2422 \text{ 日/年} \\ =\text{約 } 123.207 \text{ 年}$$

(3)(1)+(2`)年の年数

$$=\text{約 } 226.946 \text{ 年} + \text{約 } 123.207 \text{ 年} \\ =\text{約 } 390.153 \text{ 年}$$

(注記_1)

「五十鈴の 千枝の二十年 天替わる」の記述を、ホツマの暦のルールで(約)51鈴20年と訳しましたが、ホツマツタエ本文では、51鈴の御世があったとする記述がありません。

従って、「五十鈴の 千枝の二十年 天替わる」の訳を、51鈴20年と訳するか、通常は千枝で拆鈴となるものが、20年で拆鈴になり早枯れ失せたことから、50鈴の御世に早枯れし、「20年を持って千枝となす」との訳もできるようです。そのため、他のホツマツタエのスス暦の解説書では、51鈴20年→50鈴20年を採用しております。

(注記_2)

27鈴～の経過穂数を32穂/日で割算する理由
27鈴以後の穂数は、27鈴以前の2分の1であった。そのため、太陽暦の経過日数の求め時は、16穂/日の2倍にした32穂/日で割り算し経過日数を求めることになる。

条件

(1)27鈴以前の穂数を「A項」、(2)27鈴以降の穂数を「B項」とする。

一日の穂数

(1)27鈴以前の「1日が16穂」、(2)27鈴以降の「1日が8穂」と解明されている。

そこで、スス暦の基準は穂数のため、「1日が8穂」を16穂に合わせると、「2日で16穂」になる。このことから、(2)項の太陽暦の日数を求めるA項とB項の穂数の関係式は、

$$\text{A項の穂数} : \text{B項の穂数} = 16 \text{ 穂} / 1 \text{ 日} : 16 \text{ 穂} / 2 \text{ 日}$$

$$\text{B項の穂数} = \frac{\text{A項の穂数} \times 16 \text{ 穂} / 2 \text{ 日}}{16 \text{ 穂} / 1 \text{ 日}}$$

日を2日に揃えると、

$$\text{B項の穂数} = \frac{\text{A項の穂数} \times 16 \text{ 穂} / 2 \text{ 日}}{32 \text{ 穂} / 2 \text{ 日}} \\ \text{B項の穂数} = \text{A項の穂数} \times \frac{1}{2}$$

となる。

スス暦を解明した感想

ホツマの研究者の中には、今だ、アマテル神が、百七十万年まで生きたなどとする記述をそのままに信じている人がいるようです。そのため、ホツマツタエのことを話をしても、多くの国民よりホツマツタエの信憑性に疑問を持たれ兼ねないようです。ホツマツタエが再発見されて、2016年で五十年になります。再発見された五十年を新たな機会に、更に国民の多くに超古代の日本を知って戴く機会であろうかと思います。

このような現状より、アマカミ(天神)、アマキミ(天君)のスス暦の世が、古代暦だけでなく、太陽暦においても、年代、年数が判明できるようになったのは、国民にとって大変に嬉しいことだと思います。それも、現在の数学を用いた解明は、貴重な意見と思われます。今後、ホツマツタエを志される多くの若者がいるかと思えます。高度な学問を志された若者の手により、更に、当スス暦の解明を再度、精査されて、更なるホツマツタエ研究の飛躍を望みたいものです。

ホツマツタエ暦の解説書のご紹介

本研究では、ホツマツタエの暦、スス暦、アスス暦、および、日本書紀暦を通した「ホツマツタエ暦の解説書」を紹介しております。国会図書館に寄贈済です。また、Web で公開中もあります。良かったらご覧下さい。

2018 年

- ・古代暦法「スス暦」長在年暦法「アスス暦」解説秘伝の書 書籍番号 ISBN978-4-9909679-1-5
- ・改 2、3 合併版 古代日本は、いつから始まったのか(記録本)書籍番号 ISBN978-4-9909679-3-2

2022 年

- ・改訂版 古代暦法「スス暦」長在年暦法「アスス暦」解説秘伝の書 書籍番号 ISBN978-4-9909679-1-5
- Web で PDF 原稿を公開中です。

2023 年

- 改 2、3 古代日本は、いつから始まったのかの改訂版 件名変更
 - ・ホツマツタエを読み解く
日の神(天照大御神)の誕生と新紀年の成立(記録本)
Web で PDF 原稿をご覧の紹介をしています。
- (おわり)

参考文献

- 『古代日本正史・原田常春』
- 『上代日本正史・原田常春』
- 『気温の周期と人間の歴史(第一巻)・原田常春』
- 『気温の周期と人間の歴史(第二巻)・原田常春』
- 『ホツマツタエ文献秀真政傳記』
復刻監修 松本善之助 発売・新人物往来社
- 『ホツマツタエ写本(底本)』
・四 卒 々 卒 々 卒 秀真政傳紀(和仁佑安聡本)
- ・四 卒 々 卒 々 卒 ぼつまつたゑ 上下(鎬邦男)
- 『複写本・ミカサフミ』(和仁佑安聡写本)
- 『日本書紀・教育社新書・原本現代訳・山田宗陸訳』
- 『日本書紀暦日原典・雄山閣・内田正男編者』
- 『暦日大鑑・新人物往来社・西澤宥綜編』
- 『古天文学・恒星社・斉藤国治著』
- 『文献集 不知火・不知火町』

筆者 吉田六雄（よしだむつお）

ホツマツタエ研究沿革

1948 年 11 月 長崎県島原市で生まれ、宮崎康平氏は叔父に当たる

1991 年 11 月 延岡市で古代史に疑問を持ち古文獻を読み漁る

1994 年 3 月 松本善之助(ホツマツタエを再発見)に師事

1994 年 3 月 ホツマ暦の解読を始める

1995 年 3 月 ホツマ研究論文らを発表開始

・秀真伝(ホツマツタエ)に古代ロマンをもとめて』

2000 年 11 月 歴史研究本に論文「暦法で考える
欠史代」掲載

2000 年 12 月 ホツマツタエ赤坂例会に再び参加

2002 年 4 月 検証ホツマツタエ(小冊子)創刊号～
71 号まで参加

2002 年 8 月 東京天文台の斎藤国治先生(古天文学)に師事

2010 年 7 月 ホツマ暦研究会の立ち上げ

・古代日本はいつまで遡れるか 2010 年(記録本)

2011 年 暦の会(歴史研究、新人物往来社)に出席

2013 年 11 月 ホツマツタエ講座設立趣旨書(案)を
Web で発表

2014 年 3 月 ホツマツタエ史学研究会に改名

2016 年 自費出版本、Web らで論文発表を始める

・改訂版 古代日本はいつまで遡れるか (記録本)

2017 年

・フトマニの歌 ISBN978-4-9909679-0-1

2018 年

・ホツマツタエは日本書紀よりやはり古かった

書籍番号 ISBN978-4-9909679-1-8

・古代暦法「スス暦」長在年暦法「アスス暦」解説秘伝
の書 書籍番号 ISBN978-4-9909679-1-5

・改 2、3 合併版 古代日本は、いつから始まったのか
(記録本) 書籍番号 ISBN978-4-9909679-3-2

2019 年

・日本書紀に隠された 古代天皇の秘密 ～ホツマツタ
エで解く～書籍番号 ISBN 978-4-9909679-4-9

2020 年

・ワカ(和歌)姫～天の岩戸事件の解説 奉呈文 ～7ア
ヤ) 書籍番号 ISBN 978-4-9909679-5-6

2021 年

・和仁佐安聡本 ミカサフミ解説 ヲシテ原文の現在語
訳付書籍番号 ISBN978-4-9909679-6-3

2022 年

・改訂版 古代暦法「スス暦」長在年暦法「アスス暦」
解説秘伝の書 書籍番号 ISBN978-4-9909679-2-5

・ホツマツタエ 入門書 勉学のすすめ

書籍番号 ISBN978-4-9909679-7-0

・改訂版 フトマニの歌 ISBN978-4-9909679-8-7

・ホツマツタエ ホームページ全集

書籍番号 ISBN978-4-9909679-9-4

2023 年

・ホツマツタエを読み解く

日の神(天照大御神)の誕生と新紀年の成立(記録本)